明治大学
商学部

は

日本史B問題

はじめに，これを読むこと。

（注意事項）

1. この問題用紙は，13ページある。
2. これは，日本史Bの問題である。解答用紙が出願の時に選択した科目のものであるかどうかを確認のうえ，解答すること。
3. 解答用紙の所定の欄に，必ず氏名を記入すること。
4. 解答用紙には受験番号が印刷されているので，受験票と照合して受験番号が正しいかどうか確認すること。
5. 解答はすべて「解答用紙」の解答欄に記入またはマークすること。解答欄以外のところには何も記入しないこと。
6. 解答は，必ず鉛筆又はシャープペンシル(いずれもHB・黒)で記入しなさい。
7. 訂正は消しゴムできれいに消し，消しくずを残さないこと。
8. 解答用紙は，絶対に汚したり折り曲げたりしないこと。
9. 文字は一点一画まで正確に書くこと。
10. **解答用紙は持ちかえらないこと。**
11. この問題用紙は必ず持ちかえること。
12. 試験時間は60分である。
13. マークの記入例

良い例	悪い例
●	◉ ⊗ ◍

〔Ⅰ〕 以下の文章は，前近代の日本と中国との交渉について記したものである。文章内におけるａ～ｅの【　　】に入る最も適切な語句を①～⑤の中から選び，マークしなさい。また，［ 1 ］～［ 5 ］の中に入る最も適切な語句を記しなさい。

618年に建国された唐は東アジアにひろがる広大な領土をもち，高い文明を誇った。日本はこれに学び，また多くの文物を輸入するため，630年に最初の遣唐使を派遣した。遣唐使の任命は合計10数回におよんだが，なかでも717年の遣唐使船で唐に渡ったａ【① 吉備真備　② 高向玄理　③ 犬上御田鍬　④ 井真成　⑤ 藤原清河】(693？～775)や玄昉は，帰国後，その経験をもとに橘諸兄の政権を補佐した。また，帰国は果たせなかったものの，彼らと同じ遣唐使船で入唐した［ 1 ］(698？～770？)は，唐の玄宗皇帝に仕え，李白や王維とも交際があったことで知られる。彼の歌「天の原ふりさけみれば春日なる　三笠の山にいでし月かも」は，その望郷の思いを歌ったものとして，ことに著名である。そのほか804年の遣唐使船には，のちに天台宗・真言宗を開創する最澄と空海も同乗している。このとき同じ船で入唐した者のなかには，こののち842年の承和の変で失脚し，伊豆に流罪とされるｂ【① 伴健岑　② 橘逸勢　③ 伴善男　④ 橘広相　⑤ 源信】(？～842)もいた。このように奈良時代から平安前期の日本の政治・文化に大きな影響をあたえた遣唐使だったが，やがて唐の国力が減退するにしたがい，航海の危険や経済的な負担などから，遣唐使に任命されることを忌避する者も現れるようになる。838年，遣唐副使に任じられた小野篁は大使藤原常嗣と良船をめぐって争い，乗船を拒否し，隠岐に流罪に処されている。こうしたことを背景に，894年，遣唐大使に任命された菅原道真は，宇多天皇に遣唐使の停廃を建議するにいたる。

しかし，遣唐使は廃れたものの，その後も民間の商人らによって大陸の文物は輸入され続け，それらは「唐物」と呼ばれて珍重された。この頃，唐物と呼ばれた輸入品には，陶磁器・絹織物・香料・薬品・典籍などがある。907年に唐が滅亡した後，中国は五代十国の混乱を経て，宋(北宋)によって再統一された。10世紀末の奝然や11世紀の成尋らも，宋の商船を利用して大陸に渡り，仏教を修め

ている。1019年には，沿海州地方に住んでいた女真族の船50艘あまりが，突如，対馬・壱岐を攻め，博多湾を襲った。しかし，大宰権帥の [2] (979～1044)が九州の武士を統率し，これを斥けた。この事件を刀伊の入寇というが，これは対外的な紛争ということだけではなく，地方武士の実力を人々に印象づける事件ともなった。この女真族の一部族がのちに建国した国が，金である。12世紀，宋は北方の金に圧迫されて南宋となるが，日本とは以前にも増して交易を行うこととなる。

平清盛が政治の実権を握ると，福原の外港として [3] を整備し，宋船の来航を奨励した。このときの日宋貿易の重要な輸入品の一つに，銅銭があった。958年を最後に通貨の自鋳を諦めた日本は，以後，中国の銅銭を積極的に輸入し，これを国内通貨として使用していくことになる。とくに北宋で発行されたc【① 皇宋通宝　② 開元通宝　③ 永楽通宝　④ 洪武通宝　⑤ 乾元大宝】などの宋銭は，室町時代になっても広く使われ続けた。その後，宋を滅ぼした元は二度にわたって日本に襲来するが，それ以後も民間レベルの交易は継続した。韓国の新安沖で発見された沈没船も，1323年に元から日本へ帰る途中に沈没した交易船であったことが確認されている。1325年には北条高時もd【① 天龍寺　② 円覚寺　③ 建長寺　④ 東福寺　⑤ 南禅寺】の再建費用を得るために貿易船を派遣している。

14世紀，東シナ海では倭寇とよばれる海賊が暴れまわっており，中国・朝鮮の王朝はこの鎮圧に苦慮した。1368年に建国された明は，大宰府にいた南朝のe【① 九州探題　② 鎮西奉行　③ 征西将軍　④ 鎮西探題　⑤ 羽州探題】懐良親王に倭寇の鎮圧を求めたが，けっきょく実効性はなかった。これに対し，室町幕府3代将軍足利義満は1371年，九州に [4] (1326～？)を送り込むことで，倭寇の取締りや九州の南朝勢力の掃討をほぼ実現していた。そのため義満は，この実績をもとに1401年に明と国交を結び，1404年に日明貿易を開始する。なお，このとき義満の命をうけて九州統治にあたっていた [4] は，和歌・連歌などの文学的才能もあり，『難太平記』の著者としても知られている。その後，4代将軍 [5] (1386～1428)の時代，1411年に貿易は一旦中断するものの，6代将軍の時代，1432年に復活している。15世紀後半，幕府の衰退によ

り，貿易の実権は有力大名の細川氏や大内氏の手に渡るが，その後も日明貿易は16世紀中頃まで続けられている。

〔Ⅱ〕 以下の文章は，化粧にかかわる歴史について述べたものである。A～Eの【　　】に入る最も適切な語句を①～⑤から選び，マークしなさい。また［あ］～［お］の中に入る最も適切な語句を記しなさい。

日本人の化粧の始まりは古く，古墳時代にはすでに赤い顔料を施された埴輪が副葬されている。赤い色は邪悪なものから身を守ってくれるという呪術的意味を持っており，おしゃれ感覚のメークとは程遠いものであった。ただ，古代の人骨や埴輪には抜歯やお歯黒のような形跡が残されており，古くから日本列島に固有の身だしなみの習慣が生まれ，はぐくまれてきたことがうかがえる。

飛鳥時代には大陸から白粉や紅，香といった化粧品が輸入され，おしゃれとしてのメークが始まったといわれている。図は正倉院に所蔵されているA「【① 風俗図屏風　② 吉祥天像　③ 聖衆来迎図　④ 鳥毛立女屏風　⑤ 賢聖障子】」の一部である。顔に白粉を塗り，眉を太く描き，さらに紅を使ってふっくらとした唇を描いている。また額中央には「花鈿」，口元には「よう鈿」を描く(貼り付ける)ポイントメークも施されている。『日本書紀』には天智天皇の娘でのちの女帝，［あ］天皇(645～702)が献上された鉛白粉を大変喜んだという記載も残っている。

平安時代，日本風の文化が花開くと，宮廷を中心にたおやかで優美な日本独自のファッション，髪型などが流行した。何枚もの色鮮やかな衣を重ねた五衣唐衣裳，いわゆる［　い　］に身を包み，長く伸ばした黒髪，ふっくらとした顔に細い目，小さな口元の宮廷の女性たちの白い顔が印象深い。

この時代の化粧は特権階級の権威を表現するたしなみでもあったため，女性のみならず男性もこれを施すことが多かった。中世，武士の世の中になっても，一部の武士は戦場で敗れ，首を討たれた場合でも見苦しくないよう白粉や紅，お歯黒で化粧したうえで戦場に赴いたともいわれている。後醍醐天皇の皇子で大塔宮と呼ばれていたB【① 義良　② 宗尊　③ 惟康　④ 護良　⑤ 守邦】親王(1308～35)の出陣を描いたといわれている「出陣図」には，馬上弓の弦を口にくわえながら，白粉，眉墨などで化粧をしている親王の姿が描かれている。

江戸時代に入ると次第に男性の化粧がすたれ，化粧は女性全般の身だしなみとなっていった。お歯黒や眉剃りも女性の結婚や出産などの際の通過儀礼としての性格が強く表れるようになった。歌舞伎役者や花魁などのファッションリーダーの登場などによって庶民への化粧文化の波及が急激に進んだ時代であった。髪型にも時代を反映した流行が表れるようになり，「唐輪髷」から「島田髷」，そして「燈篭鬢」など独特の美しい日本髪が現れ，髪結床など美容業界も発達していった。さらに，この結い上げた美しい髷につげ櫛やかんざしなどのアクセサリーをつける風習も生まれ，ファッション産業が開花していった。「櫛になりたやC【① 薩摩　② 備後　③ 土佐　④ 駿河　⑤ 長州】の櫛に諸国娘の手に渡ろ」などの歌とともに多くの地域ブランドが確立した。Cは上布や黒砂糖などの特産品，専売品で藩財政を立て直した地域としても有名である。

一方，化粧はベースメークに白粉を塗り，眉墨，紅という基本形は維持されるものの，時代を経るあいだに様々なバリエーションが生まれていった。江戸時代後期以降唇を緑色に光らせる「笹色紅」という化粧法も流行したが，この当時来日した西洋人たちの日本女性の化粧に対する評判は総じて悪かった。D【① 大西洋　② 戦闘　③ 東インド　④ 偵察　⑤ 太平洋】艦隊司令長官のペリーも「厭うべき黒い歯」とその著書で記している。ただ，このお歯黒に対してはその美しさの意味を解き，それを擁護する見解も聞かれる。耽美的作風で知られるE【① 吉川英

治　② 志賀直哉　③ 芥川龍之介　④ 中里介山　⑤ 谷崎潤一郎】(1886～1965)はその著書『陰翳礼讃』において，闇のなかで眉剃り，お歯黒や玉虫色に光る青い口紅が白い顔をいかに浮かび上がらせるか，能や文楽人形との相似からの解明を試みている。

文明開化とともに明治政府は眉剃りやお歯黒を禁止するキャンペーンを実施した。西洋文化とのマッチングの一環として展開したもので，当初は上流階級の婦人たちをターゲットとした。当時の欧化政策を象徴するものとしては，イギリス人建築家コンドルの設計による鹿鳴館での夜会などが有名である。コンドルはほかにも旧岩崎邸や神田駿河台にある東京復活大聖堂，いわゆる［　う　］などの建築を手掛けている。以降，上流階級の女性たちから，しだいにドレスや学生袴に似合う「あげ巻」や「マガレイト」などの髪型，「洋風」化粧が普及するようになっていった。化粧品業界でも高橋東洋堂，平尾賛平商店，資生堂など洋風化粧品会社が創業し，業界を再編していく。とくに基礎化粧品や洗顔せっけんなどは高価な輸入品に頼っていたもので，その国産化は広く大衆に支持されることになった。

明治末期以降，タイピストや電話交換手などの職業婦人が自立を目指すようになり，昭和初期にはロングスカートなどの洋服を着用し，現代のショートボブスタイルである「断髪」姿の女性が銀座などを闊歩するようになる。当時このような姿の女性は［　え　］と呼ばれることもあった。既製服は今のようには普及していなかったため，服を自製するため型紙が付録された女性雑誌の創刊もこのころあいついだ。第二次世界大戦の敗戦後，モンペや防空頭巾を脱ぎ捨てた女性たちは再びおしゃれ心を取り戻し，パーマネントや赤い口紅で美しさと生活を楽しむこととなる。男性もチックやポマードなどの整髪料で髪型をきめ，街に繰り出していった。イギリスの女優ツイッギーの来日などをきっかけにミニスカートとつけ睫毛などのアイメークが一世を風靡したのが高度経済成長期の特徴である。この時期，「三種の神器」，3Cなどの普及で家事労働の時間が減少し，また日常の買い回りもスーパーマーケットの成長により一カ所で済ませることができるようになり，女性の社会進出を後押ししたのである。このような中間業者の一部排除を伴う大型小売連鎖店におけるセルフサービス方式への全般的な転換を一般に

[お] と呼んでいる。

今日，少子高齢化の進行から女性労働力の顕在化がさらに進展するなか，男女を問わず身だしなみのなかに個性を光らせるお化粧は心に潤いを与えながらわれわれの生活に脈々といきづいている。

〔Ⅲ〕 以下の文章は，江戸前期の政治について記したものである。文章内における(a)～(e)の中に入る最も適切な語句を①～⑤から選び，マークしなさい。また [(1)] ～ [(5)] の中に入る最も適切な語句を記しなさい。

江戸時代に入ると，幕府は法や制度を通じた支配を推し進めていった。最初の武家諸法度(元和令)は，徳川家康が南禅寺金地院の [(1)] (1569～1633)に起草させたもので，大名に対する根本法典として徳川秀忠の名で1615年に発布された。1635年に徳川家光によって発布された武家諸法度(寛永令)では参勤交代が追加されるなど，以後，将軍が代がわりする際に必要に応じて改変され，法による諸大名統制の基盤となった。

家光の時代までには幕府の職制も整備された。幕政の中枢には常置の最高職位として老中が置かれ，その老中の補佐や旗本・御家人の監察には [(2)] があたった。また，寺社の統制にたずさわる寺社奉行や幕領の財政と行政に関わる勘定奉行，江戸の行政や司法などを統轄する町奉行といったいわゆる三奉行も設置された。こうした要職には原則として数名の譜代大名や旗本らがつき，月番制をとっていた。京都所司代は老中に次ぐ要職で，朝廷の監察や京都町奉行の統轄，西国大名の監視などにあたった。京都や大坂，駿府といった重要都市には城代や町奉行が置かれ，関東，飛騨，美濃といった幕府直轄地では10万石以上の広域を管轄する代官である(a)【① 目付 ② 側衆 ③ 番方 ④ 郡代 ⑤ 組頭】がその民政にあたった。

またこの時期，江戸幕府は，朝廷の権力が悪用されないように，天皇や公家の生活行動を様々な形で規制した。1613年に5カ条からなる [(3)] を発布して公家の職務内容を規定し，家業と禁裏小番に務めることを命じた。さらに，その2年後には17条からなる禁中並公家諸法度を制定して，朝廷と公家に対する統制の基準を示した。また，京都所司代らに朝廷を監視させたほか，摂家に朝廷統制の主導権を与え，朝幕間の事務連絡にあたる武家伝奏を通じて朝廷と公家に対する影響力を高めていった。

こうした幕府の強力な支配により，徳川家綱が4代将軍になる頃には大きな戦乱のない安定した時代を迎える。わずか11歳で将軍となった家綱は，家光の異

母弟で会津藩主の [(4)] (1611～1672)や下馬将軍の異名を持つ大老の酒井忠清らに支えられながら幕政を行い，平和と秩序の確立に努めた。その頃，いくつかの藩では，藩政の刷新を目指して儒学者を重用したり，教育機関や研究機関を設けたりした。例えば，水戸藩主の徳川光圀は，明から亡命してきた朱舜水を招いて教えを受けるとともに，(b)【① 花畠教場　② 彰考館　③ 閑谷学校　④ 弘文館　⑤ 湯島聖堂】を設けて『大日本史』の編纂を開始した。

徳川綱吉が5代将軍となったころ，幕府の財政はひっ迫し始めていた。金銀の産出量の低下は幕府財政を収入面から悪化させ，明暦の大火からの復興費用や元禄期の寺社造営費用などの支出増加が財政悪化に拍車をかけた。当時の勘定吟味役であった(c)【① 荻原重秀　② 間部詮房　③ 林鳳岡　④ 柳沢吉保　⑤ 堀田正俊】(1658～1713)は，幕府の収入増を目指して貨幣改鋳を上申し，綱吉はこれを許可して元禄小判など質の悪い貨幣を発行した。しかし，これが物価の高騰を招き，1707年の富士山の大噴火による被害などともあいまって，人々の生活は非常に苦しいものとなった。

6代将軍家宣と7代将軍家継の治世時，幕政の中心にいたのは新井白石であった。白石は，生類憐みの令を廃止したり賄賂を禁じたりするなどして元禄期の幕政を正し，正徳小判を発行するなどして混乱した貨幣流通の正常化に努めた。また，金銀の海外流出を危惧して，1715年，長崎の貿易額を制限する海舶互市新例を発した。歴史学者としても有名で，その著書(d)『【① 武家事紀　② 本朝通鑑　③ 政談　④ 経済録　⑤ 読史余論】』では，摂関政治から徳川政権までを「九変」と「五変」に分けて論じている。

家継がわずか8歳で死去し8代将軍となった徳川吉宗は，幕政の立て直しを図る。綱吉以降続いてきた側用人政治を廃し，新設した御用取次を介して将軍の意志を幕政に反映させた。政策の実行には，旗本で後に『公事方御定書』の編纂にあたった大岡忠相や，東海道川崎宿の名主で後に地方支配のための手引書として吉宗に献じられた(e)『【① 徳川禁令考　② 藩翰譜　③ 民間省要　④ 広益国産考　⑤ 耕稼春秋】』の著者でもある田中丘隅など，有能な人材を登用した。改革の柱の一つは財政再建であった。厳しい倹約令を出して支出の縮小を図っただけでなく，上げ米を実施して大名にその石高に応じて米を上納させたり，飯沼新田や紫

雲寺潟新田などの開発を行ったり，年貢率の決定方法を検見法から定免法に改めたりするなどして増収も実現した。また，綿花や菜種，朝鮮人参などといった商品作物の栽培が奨励され，幕府の収入源の一つとなっていった。例えば，儒学者で『蕃薯考』などを著した [(5)] (1698～1769)は，西日本では知られていた甘藷の栽培を関東などに広めるために尽力した。

〔Ⅳ〕 以下の文章は，明治期を中心とした産業の発展とそれに伴い発生した社会問題について記したものである。文章内における(A)～(E)の【　　】に入る最も適切な語句を①～⑤から選びマークしなさい。また，［ア］～［オ］の中に入る最も適切な語句を記しなさい。

明治以降の日本の近代産業は繊維産業を中心に目覚ましく発展していった。すでに江戸時代においても商品経済の発達を背景に，綿業においては問屋制家内工業に基づく生産が広く展開していた。しかし，幕末の開国後，イギリスなどから廉価な綿糸や綿織物が大量に日本に流入し，在来の綿糸や綿織物生産は一時的に衰退した。

1870年代以降，(A)【① ガラ紡　② 高機　③ 飛び杼　④ 力織機　⑤ 座繰機】の技術がウィーン万国博覧会をきっかけとして日本へ導入されたことにより，日本の綿織物生産は復活することになる。この技術を取り入れて日本の手織機が改良され，生産が拡大した。このような綿織物業の復活により，紡績業が勃興することとなる。綿糸生産は渋沢栄一を中心として設立された［ア］が蒸気を動力とするミュール紡績機などを用いて大規模な生産を展開し成功を収めた。その後1897年には綿糸の輸出量が輸入量を超えるに至った。

重工業は繊維産業などの軽工業と比べると発展が遅れ，重工業の基礎となる鉄鋼も輸入に頼っていた。軍備拡張を進める政府は鉄鋼の国産化を行うべく，1897年官営八幡製鉄所の建設に着手した。ドイツの技術のもと(B)【① 三池　② 筑豊　③ 大冶　④ メサビ　⑤ 釜石】鉄山の鉄鉱石を使用し創業したものの，生産が軌道に乗ったのは日露戦争後になり，鉄鋼の生産は国内の約80%を占めることになった。1907年には三井資本の北海道炭礦汽船株式会社とイギリスのアームストロング，ヴィッカーズ両兵器会社の共同出資により，室蘭に［イ］が設立され，主に海軍向けの兵器を生産した。また，1889年に創設された［ウ］が旋盤の国内生産に成功し，精度の高い工作機械を国産で入手することが可能となった。電力分野でも水力発電が本格的に開始され，大都市では電灯が普及していった。このような重工業の発展にもかかわらず，工業の中心は依然として繊維産業のような軽工業にあった。

近代産業の発展にともない，三井，三菱，住友，安田，古河などの同族が金融・貿易・運輸・鉱山業など多方面にわたり経営を展開した。1909年に三井が三井(C)【① 合名　② 合資　③ 株式　④ 合同　⑤ 有限】会社を設立したのをはじめ，各同族とも持株会社により傘下企業を支配するコンツェルン形態をとり，日本経済を支配する独占資本を形成するに至った。

日本の産業発展は，劣悪な労働条件下での重労働や，公害や環境破壊などの社会的な犠牲のもとに支えられていた。重工業や鉱山部門では男性労働者が多い一方，軽工業における賃金労働者の多くは，貧しい農家の子女で，苦しい家計を支えるために出稼ぎにきていた。こうした人たちは，賃金前借りや寄宿舎制度により縛り付けられ，過酷な労働に従事していた。この悲惨な労働実態は横山源之助が1899年に出版した(D)『【① 職工事情　② 日本之下層社会　③ 女工哀史　④ あゝ野麦峠　⑤ 蟹工船】』などに描かれている。

このような過酷な状況に対して，労働者は労働条件を改善するために団結するようになる。1897年，アメリカから帰国した高野房太郎らが［　エ　］をおこし，これに片山潜らが加わり，同年，労働組合期成会に改組した。労働組合期成会を母体として鉄工組合がつくられ，日本鉄道矯正会のような組織が設立されるなど労働運動が盛んになっていった。このような中で政府は1900年に治安警察法を公布し，労働者の団結権やストライキ権を制限することで労働運動を弾圧した。

労働運動を背景として，社会主義思想が萌芽し，1898年，安部磯雄や片山潜らが社会主義研究会を結成し，これを母体として日本で最初の社会主義政党である［　オ　］が1901年に誕生した。［　オ　］は治安警察法により直ちに禁止されたが，日露戦争後の社会矛盾が深まると，労働争議が益々激しくなっていった。第1次西園寺公望内閣が国民に融和的な態度を示す中で1906年，堺利彦や片山潜らが日本社会党を結成し，足尾銅山争議や東京市電値上げ反対運動を支援したりしたが，急進的な直接行動派と穏健的な路線をとる議会政策派との対立で分裂し，1907年に治安警察法により結社禁止となった。その後，第2次桂太郎内閣では社会主義運動に対する取り締まりは厳しくなり，1910年には明治天皇暗殺を計画した理由で，幸徳秋水などの社会主義者が検挙され，12名が死刑と

なるという大逆事件が発生した。この事件により社会主義運動は「冬の時代」を迎えることになる。

政府は，農商務省を中心に社会政策の立場から労働者保護の政策を行おうとしていたが資本家からの強い反対があり，なかなか実現できないでいた。1911年になり，ようやく工場法が制定され労働条件改善への立法措置がとられることになる。工場法では15歳未満の者及び女子の就業時間の限度を12時間とし，深夜就業を禁止した。しかし，適用範囲は(E)【① 10　② 15　③ 50　④ 100　⑤ 500】人以上を使用する工場に限られ，紡績業では深夜就業が認められるなど，不徹底なものであった。